油井大三郎著『好戦の共和国 アメリカ――戦争の記憶をたどる』

（岩波書店、2008 年）

橋　川　健　竜

本書は、冷戦起源史、日本占領期史、アジア系アメリカ人研究、戦争観の比較など、数多くの分野で先駆的な研究を発表してアメリカ史研究･現代史研究を牽引してきた著者が、9・11 テロ後のアメリカが見せた軍事行動への突進に衝撃を受け、一般読者も視野に入れて執筆した、「アメリカの国民文化と「好戦性」の関係」（v頁）を歴史的に俯瞰する書物である。「好戦性」という問題を論じるには、戦争にいたる経緯や個々の戦闘の経過にとどまらず、軍隊組織と社会の関係、集合的記憶の形成、政治文化の変化など、数多くのことがらに触れる必要があるが、著者は独自のやりかたでそれらを整理し、有機的な議論を組み立てて、アメリカ史の全時代を新書の紙幅で論じている。以下ではその議論枠組みを照らすことを目標に、本書の内容を紹介し、検討したい。

導入部「はじめに」で著者は民主主義を「意見の対立や紛争を「平和的」に処理しようとする政治思想」（v頁）ととらえ、これと戦争によって解決を図る姿勢とを対比させる。本来は対立するはずの両者が並び立つ特殊な環境（あえて本書のタイトルに「帝国」でなく「共和国」をおく理由である）を考えるため、著者はアメリカ社会を「好戦」勢力、「反戦」勢力、そして防衛戦争を肯定するが最後の手段ととらえて慎重な姿勢を見せる「状況的非戦派」、の３つに分類する。これにより、多数派である「状況的非戦派」を武力行使容認に傾かせてきた「状況」の検討、という課題が設定される。

第１章は植民地時代の対先住民戦争・植民地戦争、独立戦争を扱い、第２章は日本では特に研究の薄い第二次米英戦争とアメリカ・メキシコ戦争を取り上げて、多くの新しい論点を提示している。植民地では常備軍ではなく民兵制度が導入されて定着し、軍事は住民が有事の際に限って対応するものとされた。ただし相手が先住民の場合、戦いは残虐な「無限定戦争」になっていき（9–12 頁）、この時代の戦争には「二重基準」（12 頁）が存在した。独立戦争中、ジョージ・ワシントンは訓練・火力に勝る正規軍を相手に苦戦する。だがこの戦争は、しだいに北米で「「国民戦争」的性格をその意識面で帯び」た（33 頁）のに加えて、外交交渉を有利に運ぶ手段として戦闘を散発的に行う「限定戦争」の伝統にイギリス軍が従った、フランス・スペインなどが参戦して国際戦争となった、などの特殊性が幸いして、「辛勝」（32 頁）で終わった。他方 19 世紀前半には、常備軍組織が形をなし、軍編成が民兵中心から志願兵・職業軍人中心へと変化し始めて、兵士個人の戦争の受け止めが組織の支障とならない体制がアメリカ・メキシコ戦争までに作られる。ユリシーズ・グラントのこの戦争にたいする批判的発言（66 頁）は、その証拠になっている。また独立後の戦争は対先住民「無限定戦争」を含め、そこで戦果をあげた軍人が政治家として台頭する踏み台になり、好戦的風潮が政治に強く入り込み始める。戦時に愛国心が高まると戦争反対勢力が厳しい非難を浴びて沈黙させられる、という現在まで続くパターン

も、この時代に起源がある（52頁）。独立戦争後には大陸軍が急速に動員解除され、ワシントンは後に大統領退任演説で国際情勢への関与を戒めるなど、初期アメリカの共和主義には「啓蒙思想的な「戦争自制」観」があった（51頁）が、第二次米英戦争後、そこから外れていく変化が目につき始めるのである。

南北戦争・米西戦争を扱う第3章と第一次・第二次世界大戦を取り上げる第4章は、今日まで続くアメリカ社会の好戦性が定着していく過程の分析といえる。南北戦争は予想に反して長期化し、妥協の余地のないイデオロギー戦争色を強めた。南北双方で大きな人的・物的資源が動員され、進歩した兵器が旧式の戦法の下で威力を発揮し、不適切な衛生・救命体制もあって多数の死者を出し（本書末尾の表3に、戦争ごとの動員数と戦死者数が挙げられている）、「アメリカ史上初の「総力戦」となった」（83頁）。その衝撃は、いったん南北戦争を肯定してしまった平和運動が再出発して思想を深める契機になったが、国民一般レベルではすぐには消化されなかった。リンカンのゲティスバーグ演説は戦争目的を後から付け加えたとされるに止まる。またよく言われる「悲劇」という言葉も、「おわりに」で言及される（244頁）が、第3章ではタイトルにあるものの本文では強調されない。むしろ著者は、「武器によって連邦制が守られたという実感」（86頁）に加えて戦後に焦点が兵士の苦闘の経験のほうに移り、それが愛国心と関連づけられたことを強調する。兵士のパレードや、星条旗で戦死者の棺をくるむ演出、従軍経験に基づく大規模な圧力団体の形成、軍人恩給の潤沢な支給などを通じて「傷」が「癒」され（96頁）、南北戦争は肯定的な記憶として定着していったのである。また、続く米西戦争への両セクションからの参加が、全国的な愛国心の高揚と相まって南北間の「和解」を推進したという指摘（114頁）は、戦争と戦争の関係が強まっていくことを示唆する。そして「すべての戦争をなくすための戦争」というウッドロー・ウィルソンの第一次世界大戦への参戦の理由づけは、南北戦争の記憶を身近に感じ、平和的紛争解決に関心を寄せた南部人らしい議論でもあったが、これを受けて少なからぬ平和運動団体が参戦支持に転じる（119, 127–28頁）。南北戦争後にはまだ反常備軍・「戦争自制」の姿勢が残っていて動員解除が急速に進んだが、その後アメリカはフィリピンを例外に非公式帝国路線を歩んで「海洋帝国化」し、リアリスト的な世界秩序・戦略観が形を成して海軍を中心に「軍事大国化」していく（115, 116頁）。第一次・第二次世界大戦のいずれもアメリカは他国に比して犠牲者数が少なかったが、第一次世界大戦後には単独介入派と孤立主義派がアメリカの国際連盟加盟を阻み、ウィルソンの国際協調路線を否定した。その後1945年までには、平時における強大な軍事力の保持と、武力行使を常に視野に入れた国際主義が確立し、第二次世界大戦の経験がそれを支えた。

第5章は冷戦下の朝鮮戦争とベトナム戦争を、第6章は冷戦後の湾岸戦争と9.11テロ後の戦争を扱い、好戦的体制のダイナミクスと一つの戦争が次の戦争に及ぼす影響を論じて、叙述は堅牢である。「パールハーバー症候群」「ミュンヘン症候群」などが政治指導者に「強迫観念」（163–64, 173頁）としてのしかかり、脱植民地化過程を反共主義の眼鏡で強引に解釈せしめたが、他方朝鮮戦争末期までに、限定戦争以上を望まない世論も確立した。トルーマンは朝鮮戦争をより全面的な戦争に拡大させないよう努力したとされ、中国義勇軍の反攻の記憶は、のちにベトナム戦争の拡大を抑える一因となったとされる。逆にジョン・ケネディについては、著者はその好戦的姿勢に光をあてて、「ケネディ神話」に

水をさしている。ベトナム戦争の泥沼化と敗戦は新たに反戦「世論」を高めさせ、長期の介入に対する警戒感を社会に定着させたため（「ベトナム症候群」（201–3 頁））、政治指導者は「ベトナムの悪夢」という新たな強迫観念を抱え込む。湾岸戦争時のブッシュ（父）政権はこれを気にするが、軍事技術の進歩に頼った短期戦の計画を立案、さらに多国籍軍の形式を整えることで戦争に持ち込み、後に虚偽と判明する情報を流布させ、日々の戦況について厳しい報道管制を敷くなど、マスメディア操作にも念をいれた（210–13 頁）。この戦争は短期間で終結するが、皮肉にもその限定戦争ぶりを批判するネオコン勢力が現れる。左翼的知識人の中にも対テロ戦争に同調する者が現れるといった 9.11 テロ後の愛国心の高揚を利用して、ブッシュ（子）政権はアフガニスタン戦争、さらに目標を大幅に拡張してイラク戦争にすすむ。世界からの強い批判にもかかわらず、「ブッシュ・ドクトリン」で先制攻撃を正当化し、国連安保理の了解を得ぬまま強行したこの戦争は、泥沼化してしまう。2008 年大統領選挙について、著者は主要候補者２名（刊行当時）の戦争に関する見解を紹介し、イラク戦争に反対したバラク・オバマもアフガニスタン戦争を肯定していて、むしろ介入を強める可能性があることを示唆し、アメリカ社会の好戦性の根深さを強調している。

「おわりに」はアメリカの戦争の歴史を植民地時代、独立から 19 世紀末まで、米西戦争から第二次世界大戦まで、冷戦期、冷戦終結から現代まで、と５つに区分した上で、好戦性の理由を領土・市場拡大と軍事が結びついてきた歴史、リアリズムの潮流、最後の手段として戦争を許容する傾向、理想主義レトリックによる反戦論の逆転と戦争の正当化、の４点にまとめ、マスメディアが愛国心に流されて批判機能を失いがちなことを補足する。そして冒頭の対比に立ち返り、アメリカで実践されている民主主義は「国民民主制」（248 頁）で「主権」に強くこだわり、国境の制約にとらわれていること、他方で他国は国際機関に「主権」を部分的に譲渡していること、を指摘する。こうした傾向にアメリカが合流していけるかどうか注視すべき、とのメッセージをもって、本書は閉じられる。

本書の好戦性分析は、政権ごとの世界戦略構想と実践の国際政治学的・短期的な比較ではなく、政府や人々を軍事力行使に押しやる有形無形の影響力、特に以前の戦争の記憶のそれという、より中長期的で感覚にかかわる側面を扱っている。議論は実際の軍事力行使に関係する発言と行動に絞られていて、「戦争」という言葉がしばしばレトリックとして用いられること――たとえば、ジョンソン政権の対貧困政策は本書でも通例に従って「貧困との闘い」と訳されているが（188 頁）、原語では war on poverty である――から一般化を図るといった飛躍は、著者の慎むところである。「好戦」と「状況的非戦」のせめぎあいや、「好戦」側に踏み出す際の葛藤をとらえるため、南北戦争従軍中に見た「積み重なった死体」を米西戦争前に思い出すウィリアム・マッキンレー（101 頁）や、第一次世界大戦への宣戦提案に対する反応を見て「若者への死のメッセージ…を賞賛するとは何とおかしなことか」と秘書に語るウィルソン（127–28 頁）など、印象的な引用が挿入されている。著者の関心が「状況」の解明にあることを明らかにし、読者の理解を助けるだろう。前の戦争の経験が次の戦争に及ぼす影響も、第二次世界大戦期の国際秩序構想への超党派的取り組み、ベトナム戦争の戦線拡大を抑える方針、湾岸戦争を短期戦にする努力、など一定の効果を持ったことが指摘される。それに比べ、いわば「学習」の様子がなく、

むしろ過去の経験に挑戦したかのようなイラク戦争の特異性は際立って見える。「反戦」勢力については、全体的に記述は羅列的で、分析は控えめである。本書での言及から考えると、南北戦争以後、平和運動は次第に一国の政治文化を超えて、国際組織による紛争調停メカニズムなど、国際的な制度設計へと向かう。とすれば、戦争反対勢力と好戦性を並列して、同等にアメリカ政治文化の内的発展に関連づけるのは難しいのだろう。その点、「兵士の手紙」の公刊、「志願兵の帰還を求める運動」への貢献など、米比戦争期の反帝国主義者連盟の活動の紹介（108–10 頁）は精彩を放つ。その主張は一枚岩とはいえないにしても、米比戦争の性格――人種差別的戦闘と公式植民地帝国化――と自国理解――独立を果たした共和国――との間に矛盾を見出したこの団体の感覚が、国内の政治文化に根ざすからであろう。

非戦感覚が好戦性に抗しきれないことが検討課題であるため、集合的な非戦感覚を表現する言葉は、本書の鍵を握る。特徴的なことに人間でなく感覚そのものが主語となり、いかなる集団がそれを抱くのかは明らかにされない。まず「気分」は、「楽観論は吹き飛び、厭戦気分が高まった」（81 頁）と、戦時中の戦況に対する感覚に用いられる。戦争終結後になると、「平時に大規模な常備軍を維持することを警戒する心情が復活した」（90 頁）という表現も見られる。だが「心情」は、ウィルソンの「親南部的な心情」（118 頁）という表現から伺えるとおり、理性的判断とは異質で、むしろ「状況」に影響されうるなど、その不安定性に特徴がある。第二次世界大戦は「「愛国的心情」の原点」（162 頁）となり、「心情」のあり方を決定的に固定してしまう。多くの政治指導者がそこに各種の「強迫観念」を感じるようになる（だが著者は、他地域では第二次世界大戦後、「戦争に対する懐疑的な心情が各地で発生した」（162 頁）とも述べ、この「心情」は西ヨーロッパでは西欧統合に結実したとする）。70 年代からは「ベトナム戦争の記憶をめぐる戦いが戦後に継続されている」（204 頁）ので、集合的に心情を語ることは難しく、この言葉は出てこない。第 5 章では戦争を厭う感覚が「限定戦争方針を支持する声」（177 頁）、「派兵を誤りとする世論」（194 頁）などと表現されるが、この「声」はもはや非戦以下になっているし、「世論」はマスメディアを通じて具現化するという含みがある。湾岸戦争時、メディア対策の前に、「世論」は軍事力行使に対する有効な批判には発達しなかった。この戦争を短期の限定戦争にしたのはむしろ、指導者の側の「ベトナムの悪夢」という強迫観念である。9・11 テロに伴う「愛国心の高揚」（221 頁）を経て、オバマが語るのもあくまで「選択的な非戦論」（239 頁）である今日、アメリカの非戦感覚について、著者はきわめて懐疑的である。

なお、本書は「意識」という言葉も使っている。「「アメリカ人」としての抵抗意識」、「「国民戦争」的性格をその意識面で帯び」（共に 33 頁）、「「反常備軍」意識」（34, 39 頁）、「民兵の場合は市民意識や地方意識が戦争遂行を制約する側面があった」（68 頁）など、植民地期から独立戦争期に関する議論で頻出し、非戦感覚の表現にも多く用いられる。逆に、この時期については「心情」は語られない。「意識」と「心情」が交錯するのは南北戦争後の時期で、前の段落でも引用した「平時に大規模な常備軍を維持することを警戒する心情が復活した」（90 頁）という表現がみられる。評者は本書における「意識」について、「心情」よりも冷静な思考に定着し、確固としている印象を抱くが、もし反常備軍「意識」から「心情」への入れ替えが非戦感覚の相対的な後退を意味するのなら、「復活

した」という言い方は適当だろうか。ちなみに南北戦争後、「意識」は「実際に銃によって個人の生命や財産を守ろうとする意識を強めた」（86 頁）、「南北それぞれに強い敵対意識」（88 頁）など、好戦性を弱めるよりは強める側面について使われ、好戦性の定着を感じさせる。そして 20 世紀に関する記述に「意識」は登場しない。このように、人々の集合的思考がはっきり形を成し、啓蒙思想にもとづく非戦性が強かった時代として、著者は 18 世紀を高く評価している。だが近年では国王への忠誠心も含めて、「心情」的側面から植民地社会と政治を語る研究も出ており、[1] 本書の描く 18 世紀の思考世界は少し気にかかる。

本書はこのように、時とともに情動性が強まっていく印象を与えるが、ジェンダーと戦争の関係を示唆する記述も、情動性を感じさせる。米西戦争期の積極的開戦派セオドア・ローズヴェルトの男らしさへのこだわりは「強迫観念」と紹介され（102 頁）、「南部連合の大統領デーヴィスにペチコートをはかせ、女性のイメージでからかう政治漫画」（89 頁）への言及や、地面に縛り付けられたまま「弱虫！」などとののしられる夢を見たと語るリンドン・ジョンソンの回顧（195 頁）も、ジェンダーにかかわる。著者が挙げるその他の好戦性亢進要因とジェンダーはどうかかわり、いつどの程度重要だっただろうか。男性性の不足ないし欠如を言いつのることは、好戦勢力の側が非戦感覚を攻撃し、情動的にくじく手段とも考えうる。この面を強調しすぎると議論が平板になる危険があるが、ニュアンスにかんする見解を聞きたいところである。

なお紙幅の問題もあって、好戦性を支える諸要素の多くは、アメリカ社会に定着した後は論及されなくなる。銃の流布のあり方が南北戦争後に変化し、「武装した民主制」（86 頁）の色彩を強めたと指摘されるが、銃の問題は 20 世紀を扱う章では出てこない。またベトナム戦争についてしばしば言われる、アメリカ兵の人種差別意識と軍略の暴虐性の関係も取り上げられない。無限定戦法の問題は、米比戦争で触れられた後、第二次世界大戦中の無差別爆撃や原爆投下に移り、敵集団の人種・民族的アイデンティティから焦点が外れていく。本書の課題は好戦性であって暴力一般ではないことを考えれば、論点が現れては消える感じがするのもやむを得ないだろうか。この点を含め、19 世紀末から今日までのアメリカ社会の多民族化･多文化化と好戦性・非戦性の関係は、基本的には愛国心の高揚に取り込まれるという理解だろうか、取り上げられない。第二次世界大戦期と 1950 年代に平和運動団体が、国内の人種差別問題に活動の焦点を移したこと（153, 180 頁）が触れられるにとどまっている。

加えて、細部にわたるが気になる点もある。英蘭関係の文脈で 17 世紀後半にイギリスが制海権を持ったと主張することは可能だろうが、英仏関係の場合、人口や陸軍力ではフランスのほうが上であり、それをイギリス側は強く意識していた。17 世紀後半に「フランスは、イギリスの覇権に挑戦を始め」（13 頁）と言えるだろうか。また仏領カナダの地名は、英語読みが通例になっていない場合はフランス語読みで表記してもよいかもしれな

---

[1] Brendan McConville, *The King's Three Faces: The Rise and Fall of Royal America, 1688–1776* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006); Nicole Eustace, *Passion Is the Gale: Emotion, Power, and the Coming of the American Revolution* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2008).

い。19 世紀については、「連邦への復帰」（82 頁）や「アンドリュー・ジョンソン大統領は、連邦支持派ではあったが」（95 頁）、などにおける「連邦」は the Union のことであろうが、「リンカンは連邦制を守るために応戦を決断し」（72 頁）や「連邦制が守られたからといって、南北の差を超えた共通意識が形成されたわけでもなかった」（90 頁）における「連邦制」は、the Unionとfederalism の両方を指すようにも見える。また南北の兵士間の和解の象徴の一つとして、1917 年にゲティスバーグにようやく作られたリー将軍騎馬像（97 頁）は、図像を紹介するとよかっただろう。逆に、69 頁に写真がある同じ戦場の「ペン部隊記念碑」は連邦軍側か、本文が「北部の側から南軍関係の記念碑建設が助長され始めた」（97 頁）と示唆するとおり南軍側なのか、説明が必要である。

評者の能力の問題で本書の前半にコメントがやや偏ったが、考察して最後に残るのは、やはり著者の力量への感嘆である。喫緊性ある大きな主題――帝国アメリカの重要側面の形成史――を設定して、関係する事実や論点を、日本のアメリカ研究界では研究が極めて手薄な軍事にかかわるそれを含めて、渉猟し、組み合わせたこと、そしてアメリカ史の全時代を新書一冊で、一つの有機的な流れとして扱いきったことは、改めて強調しておきたい。本書は一般読者に「心情」的楽観論を戒めさせ、歴史の重層的な蓄積が現在の状況を作っていることと、長期的な構えで今後の世界やアメリカを考えるべきであることを、実感させるだろう。そしてアメリカ史研究者には、本書はまた別の重みを携えて迫ってくる。緻密な本国の研究に日々触れる日本のアメリカ史研究者は、自分の研究でも細部の彫琢に気を取られがちで、自分の主題の持つ意味を考える作業が後回しになりうる。だが本書は、本来は順番が逆であることを、否応なく思い出させるのである。